細川勝元邸跡

[東陣]

細川勝元（1430～1473 年）は将軍に次ぐ役職を務めた位の高い侍で、京都の大部分を荒廃させた内戦「応仁の乱」（1467～1477 年）の勃発において果たした役割で名を残しています。

細川は、将軍・足利義政（1436～1490 年）の跡継ぎなどの問題を巡り、義理の父親の山名宗全（1404～1473 年）と反目し合っていました。この権力争いが戦を引き起こし、まず細川が攻撃を仕掛けました。細川の軍は都の北東部を制し、一方で山名は西側を支配しました。京都のうち細川が制した部分は後に東陣（東側の陣地）と呼ばれるようになり、山名が占領した地は西陣（西側の陣地）と名付けられました。

勇猛な大物軍人としての評判にもかかわらず、細川は当時の同じ階級の武士に典型的であったように、芸術にも精通していました。1450 年には龍安寺の有名な禅の石庭を作ることにも参画しました。この寺と庭は応仁の乱の最中に破壊されましたが、後に細川の息子がそれらをかつての荘厳な姿へ戻すため、修復を続けました。

広大な庭園に囲まれていたと考えられている細川の邸宅跡を示す正式な記念碑は存在しません。